



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	高校内居場所カフェ実践は学校に何をもたらすか : 2つのカフェ運営の事例から
Author(s)	小川, 杏子; 田中, 俊英; 石井, 正宏
Description	日時: 2018年11月21日(水) 13:00~15:00 場所: 北海道大学教育学部3階大会議室 主催: 北海道大学大学院教育学研究院 教育行政学研究室 科研費「拡散・拡張する公教育と教育機会保障に関する国際比較研究」(18H00970) 報告 1: 小川 杏子 氏 (NPO法人パノラマ／お茶の水女子大学大学院・院生) 「高校内居場所カフェ実践とは何か: 田奈高校 “ぴっかりカフェ”が目指すもの」 報告 2: 田中 俊英 氏 (一般社団法人officeドーナツトーク・代表) 「となりカフェ (大阪府立西成高校・高校内居場所カフェ)の始まりといま」 報告 3: 石井 正宏 氏 (NPO法人パノラマ・代表理事) 「外部支援者は学校の中でどのようにバランスを取っているのか?」 司会: 高橋 寛人 (横浜市立大学) 記録・編集: 高嶋 真之 (北海道大学大学院教育学院・院生)
Citation	公教育システム研究, 18, 107-125
Issue Date	2019-09-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/75775
Type	departmental bulletin paper
File Information	050_AA11562857_18.pdf



<公開研究会記録>

日時：2018 年 11 月 21 日（水）13:00～15:00

場所：北海道大学教育学部 3 階大会議室

主催：北海道大学大学院教育学研究院 教育行政学研究室

科研費「拡散・拡張する公教育と教育機会保障に関する国際比較研究」（18H00970）

報告 1：小川 杏子 氏（NPO 法人 パノラマ／お茶の水女子大学大学院・院生）

「高校内居場所カフェ実践とは何か：田奈高校“びっくりカフェ”が目指すもの」

報告 2：田中 俊英 氏（一般社団法人 office ドーナツトーク・代表）

「となりカフェ（大阪府立西成高校・高校内居場所カフェ）の始まりといま」

報告 3：石井 正宏 氏（NPO 法人 パノラマ・代表理事）

「外部支援者は学校の中でどのようにバランスを取っているのか？」

司会：高橋 寛人（横浜市立大学）

記録・編集：高嶋 真之（北海道大学大学院教育学院・院生）

高橋：最初に、15 分ぐらい NPO 法人パノラマのスタッフの小川さんから話していただきます。その後、カフェを始めて発展させていくにあたって、教育委員会や高校の先生方という面倒なことがあった、という話をしていたくことを予定しています。

と言いますのも、学会などで高校生支援や若者支援の実践で NPO の方をお招きすると、非常に上手くいって、学校もハッピー、生徒もハッピーという感じで終わります。けれども実際は、学校側も受け入れ側も注意するし、教育委員会もなかなかお金を出してくれない。そういう中で、続けていくのが非常に大変で、今なお継続的に資金を得られているわけではありません。そういう話を 30 分程度で田中さんと石井さんのお二人にお話していただいて、休憩をとった後、質疑とご意見など、皆さんで交流ができたと思います。

それでは報告をお願いします。

【報告 1】

“びっくりカフェ”の設立①

——NPO 法人の概要と高校支援

小川：NPO 法人パノラマのスタッフの小川と言います。昨年からパノラマに入ってスタッフとして活動しています。

まず、パノラマの紹介をさせていただきたいと思います。2015 年 3 月に設立され、現在職員としては石井と小川の 2 名で、あと理事・幹事がいる小さな団体です。神奈川県横浜市を中心に活動をしています。パノラマが何をやっているのかという話の前に、どうして法人ができたのかと高校内居場所カフェがリンクしているので、簡単に紹介させていただきます。

代表の石井が「パーソナルサポートサービス」という内閣府のモデル事業で、支援員として神奈川県立田奈高校という高校に入っていました。最初は相談員という形で高校に派遣をされていた。けれども、その事業の資金が打ち切りになる話があったとき、「外部から来てい

る石井という存在が、やはり学校としても大きい」ということになりました。「是非、石井が残れるような形を作れないか？」ということでクラウドファンディングを行いました。先駆的に実践を行っていた大阪の事例を考えたときに、「交流相談という相談室にこもらない形＋カフェという形がいいじゃないか」と、「「びっくりカフェ」というのをやってみよう！」ということになり、クラウドファンディングによって法人が立ち上がっています。そのため、他の事業の一環で始まったというよりも、NPO 法人パノラマはびっくりカフェと共に歩んでいるという感じです。

もう一か所、2017 年 6 月から神奈川県立大和東高校で「ボーダーカフェ」というのもやっており、今は 2 学校で高校内居場所カフェを運営しています。

クリエイティブスクールと生徒の特徴

「クリエイティブスクール」というのが田奈高校と大和東高校の特徴で、学力試験がない県立高校です。北海道には基本的にないという話を伺ったんですけども、大阪や東京にはあって、大阪だと「エンパワメントスクール」、東京だと「チャレンジスクール」という名前と呼ばれる学校です。中学校までの成績が考慮されことなく、面接試験を経て入学できる高校です。クリエイティブスクールは、中学校まで持てる力を必ずしも十分に発揮しきれなかった生徒を積極的に受け入れる、ということをも目的として設けられている高校です。

「学力下位校」「教育困難校」と言われることも多くあります。こういう学校に集中しやすい生徒たちの中には、経済的なことなどの環境が安定していない生徒が多くいます。具体的には、貧困や何らかの虐待経験をもつ、海外がルーツの生徒も多いので言語的障壁がある、発達障害のグレーゾーンにいるなど、そういう生徒

たちが多くいます。やはり経済格差と教育格差がリンクしていたり、子どもの貧困が親から連鎖していたり、シングルのご家庭だと両親がいる家庭よりも貧困状態に陥りやすい、という日本の社会的な背景があったりします。さらに、経済的なものと虐待がリンクしていることもあります。そういう背景を複合的にもっている生徒が多く入学している学校となっています。

“びっくりカフェ”の設立②

——高校の限界と福祉的視点の導入

最初に始まったのは田奈高校です。学校の中で今まで教育的にやっていたことではまかないきれないことがたくさん出ていたときに、「もう少し福祉的な視点を入れなきゃいけないじゃないか？」というニーズが高まりました。先生たちだけでやはり手一杯で、スクールソーシャルワーカーやキャリアカウンセラーなどだけでも、やはりどうしようもないことがたくさんありました。

まず、ニーズを早期発見してサポートしていく、という取り組みをしようとなりました。そこで、石井のような、曖昧な専門性というところで、専門家同士の間をつなぎ、生徒との関係をつないで専門家にパスを回していくような存在として、ユースワーカーの人たちが学校に入ってきたという背景があります。それでびっくりカフェとかボーダーカフェというのが、今開催されています。

カフェのコンセプト①

——安心できる場の提供と信頼関係の構築

カフェの役割としては、まず、学校の中で安心できる場所を提供するということがあります。びっくりカフェの場合は、元々「びっくり図書館」という場所があり、司書の松田さんという方が「どんな生徒も来られるように」ということで、例えば、ソファがあってそこでみ

んな寝ていたり、本棚の間に座ったりする、そういう工夫がされています。カフェも同じようなコンセプトで、まず安心して過ごせる場所を提供する。そこで、まずは私たち大人が出会って、そこで関係性を少しずつ築いていく中で、だんだん信頼してもらって、不安やもやもやとしたことがあったときに、次第にそういうことをこぼせる場所になってほしい、というのが最初にあります。

“ぴっかりカフェ”の概要

2017年度のぴっかりカフェは、延べ人数で1回平均158人、最高に混む日は260~270人くらい来ています。ぴっかりカフェは昼休みの12時から16時頃までやっています。5時間目の授業があるときは、その時間は休憩、カフェは一回閉じるという形で運営しています。

“ぴっかりカフェ”の入口

ここからカフェの様子をお見せしながら進めたいと思います。

入り口にカップを置いてあるので、ここで生徒たちはカップをとっていきます。これはプラスチックと紙カップなんですけど、今は全部リユースのカップになっています。やはりお金がかかるし、環境的にももったいないということがあって、全部繰り返しにしています。

そこに名前を書いてもらうというのを大切にしています。名前を書いてもらって、ジュースを注ぐときに見て「〇〇ちゃん」「〇〇くん」と言ったり、その次に会ったときに「「〇〇ちゃん」だよね？」という話をしたりすることはすごく大事です。「なんで覚えているの」「覚えてくれてたんだね」と言われることは本当に多いです。そこで信頼関係が少しずつ築かれていくなという感じです。

こういうふうに、カップには名前だけではなく絵を一緒に描いている生徒もいます。これは、

クリスマスの季節に、動物とサンタさんを描いた生徒です。

図書館の奥にカウンターを作っているんですけど、カウンターに来るとジュースとお菓子がもらえます。ボランティアさんがここにたくさん立っていて、生徒たちがボランティアさんに「このジュースをちょうだい」と言ってお菓子は何も言わずにもらえるんですけど、そういう形でもらっていきます。その中で色んなコミュニケーションが生まれます。あとはコーヒがあったりします。

昼休みと放課後の様子①

これはお昼の様子です。この真ん中に数人ボランティアさんがいて、あとは生徒です。慣れている生徒だと、カウンターの裏にも入ってきて、ここから手を伸ばしてジュースをつぐこともあります。「これ入れて」「あれ入れて」という指示も飛んでいます。

こんな感じで、「ことば」って書いてある下にカウンターがあるんですけど、入口からは全く見えない状態です。これは一番混むお昼で、このときは100人以上の生徒が来ています。でも、ちょっと隙間の場所があって、それが図書館のすごく良い居場所になっています。こういうふうに本棚の間に折り畳み椅子を置くとくんですけど、そうすると、そこで静かに過ごしたい生徒は座っていたり、友達同士でおしゃべりしたりします。お昼はこんなに満席です。

立ち食いもしています。お味噌汁だけを出すんですけど、それを出すカウンターの前で、そのまま立って食べて帰っていく生徒がいます。やはりお昼を持ってきていない生徒も一定数います。お味噌汁はインスタントしか用意できていないんですけど、その具を用意しておくと、自分たちが目一杯膨らまして、美味しくなくなるんですけど、食べています。

放課後は全然様子が違って、後ろに空いてい

る席が見えると思いますけど、まったくと時間が流れてきます。ソファに座ってギターを弾いていたり、ボランティアさんに皿回しをみせたり、カウンターの周りでのんびりとおしゃべりをしたりしています。

これは、石井さんと生徒が頑張ってドミノを立てていて、多分私が邪魔しようとして怒られているところです。なぜか後ろに棒を持って男子生徒が立っています。

生徒に伝えていること

オリエンテーションを1年生のときにしていて、生徒には「カフェは自由な場所だよ」「寝てもいいし、別に機嫌悪くたって笑ってたって、何してたっていいんだよ」と伝えています。実際、バイト前にちょっと寝に来る生徒もいます。ただし、「人の自由だけは邪魔してダメだよ」とも伝えています。

カフェの特徴①——学校的ではない雰囲気

カフェのすごく良いところは、学校の中にあるながら学校的ではない雰囲気がある、ということなんです。ボランティアさんに対しても、養成講座の中では、「指導的な関わりではなく支援的な関わりを」と石井がよく言っています。

「学校の中の「溜め」という言葉をレジュメの最初の方に書いたんですけど、先生が来たときに、これは昼休みが終わって授業に行かないといけない時間の写真なんですけど、「早く行きなさい」「すぐに行くんだ」という強い言い方ではなく、「もうそろそろ時間だから行こうね」とか、生徒たちに寄り添って「もうちょっと休みたいけど行こうね」とか、そういう声かけをしてくれています。最近、先生が生徒と一緒に来て、教室とは違った関係性が見られたりもします。

こういうカフェの中でジュースを飲みながら、最近学校に来てなくてちょっと心配だった

生徒とおしゃべりをする場所になっています。学校の中にあるけれども安心できたり、ちょっと不安をこぼせる場になっていたりすることが、生徒たちの課題の早期発見につながる場所になっている要因ではないかなと思います。

カフェのコンセプト②

——「ヒューマンライブラリー」

あと、先程から紹介しているように、びっくりカフェでは、ボランティアさんが年間400人くらい、毎回7~8人のボランティアさんが来ます。ボランティアさんと何となくおしゃべりしたり、お菓子が出てきてすぐ手に取れたりできて、カウンターの周りが結構人気です。ボランティアさんを囲んでおしゃべりをしている光景が、カフェの色んなところで見られます。びっくりカフェのコンセプトが「ヒューマンライブラリー」で、多様な生き方をしている人たちがその場にいます。多様な大人と出会って話せる場所というのを目的としています。

こういうふうに近所でイタリアンをやっていて、政治家を目指している方がお話をしている。奥のおじさんは色んなPVの照明をやっている方なんですけれども、専門学校に行きたい生徒、音響や舞台関係で働きたいという生徒の話も聞いています。近所のおばさんでNPOの方なんですけど、カフェに来て色んなおしゃべりをします。ロンドンから一時帰国されている方が来て、ロンドンに興味がある生徒を繋ぐこともあります。最近、お子さんを連れてきて親子で来てくれるボランティアさんが結構多くて、そうすると、生徒はお父さん・お母さんと話をするし、子どもとも話をします。こうして「ああ、こういう生き方ってあるんだ」という新しい発見に繋がってしまいます。

昼休みと放課後の様子②

私はこの写真がすごく好きなんです。これは

何をしているところかという、この生徒がお味噌汁に具を入れすぎて、もう溢れんばかりに具が膨らんでしまって、ほとんど味噌の味がしない状態になって、案の定美味しくなくて残したんです。いつもそういうことやるので、ボランティアのおばさん方に囲まれて注意されているところなんですけど、何となく嬉しそうというか、「分かったよ」とか言いながら、顔がちょっと嬉しそうなのが「いいなあ」と思っています。こういう感じで話をしているけど、関わってくれることが嬉しい、みたいなところが若干あります。こういうことを積み重ねていくうちに、色々と関係ができていきます。

こういうふうにはレギュラーの生徒になると、だんだんカウンターに入って手伝いをしてくれます。新しいボランティアさんたちが来たときに、一番に気づいてサポートしてくれるのも生徒たちです。

カフェの特徴②

——大人と高校生の役割の入れ替わり

カフェでは、大人と高校生の役割が固定しているのではなく、入れ替わる瞬間がすごく多いのが特徴だな、というふうに思います。大人は「高校生のため、みんなのために何かしたい」と思って来るんですけども、実際に来てみると、その人の方が初心者なこともあるので、逆に助けられるという経験をします。私も結構最初の頃は失敗をして、ボランティアさんに集合時間を伝え間違えて開店前に誰もいないというときがあって、そういうときに生徒たちが主体的にカフェの運営をやってくれたこともあります。

これもすごく象徴的ですが、たくさんの大人が視察に来るんですけど、その話を石井さんがしていたときに、何気なく隣に立っていた、これまでレギュラーでいつも来ている3年生の生徒がいて、石井さんが「なんか話してみる？」

みたいに話を振ったら、結構ちゃんと色々説明していましたよね。

石井：視察者の質問に生徒が答える、っていうのをやらせたんですけど

小川：そう。その後、「大人に頑張っちゃったー、恥ずかしい」みたいなことを言っているところに飛んできたんです。でも、すごく嬉しそうで、「自分はちょっと役割を果たせた」「カフェの役に立っていた」「できた」という感じがあったみたいで、そういうことがカフェならではのだなと感じました。

ボランティアに関する生徒の素朴な疑問

ついこの間、「ぴっかりカフェに来ている大人は一体何者なんだ」と質問を受けて、面白かったので紹介したいと思います。

ぴっかりカフェに来ている大人は、木曜日の午後から夕方、その時間はみんな仕事しているはずの時間に来るので、「一体何をしている人たちなんだ」と生徒に聞かれるんですね。「それは大人に聞いちゃいけない気がする」と言われて、「いや、聞いてごらん」と言い返しました。「なんでだろう」と思って話を聞いていたら、「そんな時間に仕事を休んで来ている大人はまっとうな人間じゃないに違いないから、あいつらはヤンキーだ！」みたいなことを言っていて、「仕事を休んでいる＝バックレている」みたいに思っているらしく、「ヤンキーなんじゃないの？」と言われました。そういう変な大人がいっぱいいます。

この人は毎回ゲームしに、バッグいっぱいに自分の家にあるボードゲームを詰めてやって来るおじさんです。こんなふうには生徒が何かやっているのを大人が見ているというのが日常の光景です。

カフェのコンセプト③

——「文化的なシャワーの提供」

あと、もう一つのカフェのコンセプトが「文化的なシャワーの提供」です。なかなか家庭で季節のイベントや行事ができない生徒も多いので、そういうことをカフェで提供しています。

石井さんがよく言っているのが、「人と繋がる中で重要になるのが、フックになっていくのが、文化資本だ」という話です。例えば、北海道に修学旅行に行ったことがあって北海道を知っていると、浴衣を着ると結構苦しいとか、そういう話をできることが、人と繋がっていく上で重要だという話をしています。その一つのきっかけとなるように、文化的なシャワーを提供しています。日常的には、ウクレレやギターを一緒に弾くこともあります。

これは浴衣パーティーの写真です。プロの理容師さんが来て、ヘアメイクと着付けをしてくれました。今回は寄付していただいた浴衣をみんなに着てもらいました。着た後に表情がパッと変わるのが印象的で、こうやって大好きな先生と一緒に写真を撮ったりしていました。

これは短冊に「リア充に災いあれ」って書いてあるんですけど、こういうふうに短冊に願いごとを書いてもあります。こういうイベントの中にも、ふとした瞬間にちょっと話をしていると、相談に乗っていると、そういう場面があるのがすごく印象的です。イベントだからイベントで終わりというより、イベントをきっかけに何か新しい関係ができたり、そこをきっかけに「実はこういう嫌な経験があるから浴衣が嫌いなんだ」という話が出ていたりするな、と思います。

これは集合写真です。こんな感じで全員着付けをして一日楽しめます。

これはカレーパーティーの様子です。神奈川県内の色々な農家さんがお野菜を寄付してくれて、これはほぼ寄付で行っているんですけど、

毎年夏休み前の最終日にカレーパーティーをしています。カレーパーティーをしていると、カレーにどんな野菜を入れる、どんなお肉を入れる、どんな味付けをする、というところでそれぞれの家の様子が出てくるとか、それぞれ大人が「これを入れたら美味しいんだよ」と話して、実際に茄子を入れてみたら美味しかったとか、そういう新たな経験のきっかけを撒いています。そんな感じでグループごとに分かれてカレーパーティーをしています。毎回校長先生は食べ比べをして優勝チームを決めます。これは去年の写真なんですけど、1年生が優勝して大喜びしています。

こんな感じで、文化資本のシェアというのもカフェの役割として行っています。

カフェ以外の場への広がりとの繋がり

——“どろっぴん”と“バイターン”

最後に、「高校内居場所カフェってそこだけで完結しているわけじゃないんですよ」ということをご紹介します。

これは文化祭である生徒と一緒にステージに立ったところです。カフェで出会った生徒が石井さんに「一緒にステージに出ませんか」という話をして、一緒に歌を歌ったという場面です。そういうふうに、信頼関係がカフェの外に広がっていくということが多々あります。

パノラマはカフェ以外に、「青春相談室どろっぴん」という個別相談と有給職業体験「バイターン」という就労支援を行っています。カフェで「この辺が課題じゃないか」「ちょっとこういうことが心配だね」というふうになったことが、どろっぴんに繋がって個別で話を聞くきっかけになったり、「そう言えば、バイト探していて何社も受けたけど受かってないよね」という生徒に、「じゃ、バイターンという仕組みがあるからやってみる？」「やってみるかどうかを相談しましょうか」という話になって、

バイターンという形で就労支援をしたり、色々な繋がりをつくっていけるというのが、高校内居場所カフェから更にいくつかあることのメリットだと思っています。どろっぴんは、こういうふうに気楽に来てもらえるということをまずは大事にしています。

“どろっぴん”での個別相談

本人からすると、モヤモヤしていて言葉にできないということがたくさんあります。例えば、ただ「キモい」「ウザい」と言っているけど、「いつもよりちょっと様子がおかしいよね」ということがあったとき、そこから話を聞いていくと、実は家が今大変だったり、本人が今しんどいことを抱えていたり、そういうことがあります。

なので、私たちはカフェで出会って、「なんかいつもと違って変だなあ」と思っていたら、まずそこからどうしてそういう状態になっているのかを、不安をほぐすという作業を個別相談でしています。例えば、「教室でもちょっと様子が変だね」「最近学校に来ていないよね」ということがあったときに、個別相談に入るんですけども、そこで聞いたことは学校側にもフィードバックします。担任や担当の先生に共有することによって、ただ先生は「困った生徒だなあ」と思っていた生徒が、「実はその生徒自身が困っているんだ」ということを、先生たちにもう一回気付いてもらうきっかけになるのも個別相談ではないかな、と思っています。田奈高校では、昔から「困った生徒」は「困っている生徒」だ」という言葉があるんですけども、そういう良い文化の継承にも役立っていけばいいのではないかなと、ちょっと思っています。

“バイターン”での有給職業体験

バイターンは、私たちが開拓してきた地域の

企業さんに、生徒がバイトとして入って就労することで、本人が苦手なこと・得意なことを見極めてもらい、一緒に成長をしていく、その成長に寄り添ってもらう仕組みです。

この生徒もカフェで出会いました。最初はただカウンターの前で黙々とお菓子を食べて、本を読んで、誰ともコミュニケーションを取らない生徒でした。「カフェでいつもすごい食べているよね」「やっぱりちょっと一回話を聞いた方がいいじゃないかな」という話になって、個別相談に行くと、いろいろな家庭の環境とかが見えてきました。本人も就労したいということだったので、「まずはバイターンという形で本人が何かできるのかを見極めてサポートしていこう」という話になり、バイターンに入っていきます。

今、不動産屋さんが紹介している清掃会社でバイトしているんですけど、本当に一生懸命やっています。不動産屋さんの人が話を聞いてくれたり、お腹が減っていたらご飯を作ってくれたりしてくれています。そのオフィスが自分の居場所みたいになっていて、自分が得意な絵を描いて持っていったり、「お正月にどこにも挨拶に行く場所がないんだ」という話から、「ああそうか、バイト先にお世話になっているから、そこに挨拶に行こうかな」と言ったりしています。「地域の顔が見える場所」になっているとか、「なんだか親戚のおばさんみたいな感じになっているなあ」というふうに感じます。

1～2年前までは誰とも喋っていなかった生徒が、今こんなふうにボランティアさんと笑顔で会話をしている光景を見ることも多いです。安心する場所・安全な場所が提供されて、しかも一生懸命話を聞いてくれたり、寄り添ってくれたりする大人がいることによって、これだけ人を変えるんだなあ、とすごく感じているところです。

私からは以上です。ありがとうございます。

【報告 2】

高橋：ありがとうございました。さらにいろいろ聞きたいことがありますけれども。

このような素晴らしい高校内居場所カフェの元祖が、大阪府立西成高校でつくられています。しかも、大阪府では教育委員会がお金を出すということです。その経緯を田中さんから話してもらいたいと思います。

“となりカフェ”の概要

田中：西成高校の場合は、こんな大規模模で 150 名とか 200 名とかではなくて、小規模型の居場所カフェで多くて 30 名くらい、常時 20 名前後くらいで、相談室の中でやっています。

カフェの機能①——安心安全の空間の提供

居場所カフェの機能については、小川さんの発表通りで、まず安心安全の空間の提供です。西成高校だけではなくて、いわゆる「教育困難校」と言われているところは、児童虐待のサバイバーの子が 4 人に 1 人くらいはいます。でもそれは、学校で把握しているだけでそれだけ、という感じですから、カムアウトしていない生徒も入れると、過半数以上は広い意味での虐待被害者なんですね。そうすると、お家で安心して過ごすことはできず、教室でも割と荒っぽい先生がいたりしますから、生徒たちが日々日常に安心して過ごせる空間が、その実感がゼロだったりします。そこで、「となりカフェ」では、ぴっかりカフェもそうですが、安心安全の空間をつくろうと、「安心安全のサードプレイスがここにある」ということを示すだけでも、本当の、って言ったらあれですけど、貧困支援のコアの部分だと思います。

カフェの機能②——ソーシャルワークの提供

2 つ目はソーシャルワークの提供です。これは大規模なカフェではなかなかできないんで

すけど、小規模なカフェを週に 2 回くらいやっていると、例えば、2〜3 週間と同じ服を着ていて、においがお風呂に入っていないさそうだったり、昼食を食べてなくて、お友達といつも分け合いっこしたりする生徒に出会います。それを見ると、広い意味でのネグレクトが発見できて、これを先生と共有するような形です。

ソーシャルワーカーの導入の部分は、小規模なカフェがやりやすいかなと思います。

カフェの機能③——文化の提供

3 つ目は、文化の提供ということで、色んな大人と出会う、浴衣の着付け大会は、小規模型では生徒たちはみんな恥づかしがってなかなかできないので、大規模型の方が得意なんです。僕は和東高校のボーダーカフェを 1 回見学しに行ったんですけど、15 時半の放課後になった瞬間、いきなり大音量で良いスピーカーから音楽が流れていて、あんなのは西成高校の小さな相談室ではなかなかありえない。

でも西成高校は、例えば、文化祭のときに、マカロンを生徒と一緒に一所懸命作ります。生徒は、マカロンを聞いたことがあるんですけど、食べたことがないんです。ブラジルやベトナムのちょっとおしゃれなコーヒーをあえて調達してきて、生徒とシェアするなどしています。

何が言いたかったかということ、虐待の連鎖から出るには、親たちが持っている、自分の家にある、すごい狭くて固い、リジットというか、すごく固い価値観から出るのが一番手っ取り早いんです。親御さんといっても 18〜19 で産んでいますので、16 歳の子どもを持っている親御さんたちは 34〜35 歳でまだ若者です。その若者は EXILE が好きだったりします。残念ながら単調でつまらない文化を愛しているんですけど（笑）、そこから出るのは、やはり虐待の連鎖から出るのに結構手っ取り早い方法です。その文化の中では、浴衣など知りま

せんし。だから、そういう意味で文化を提供するというのがあります。小川さんの発表に加えるとしたら、それがあります。

“となりカフェ”の設立①

——ひきこもり支援の概要

で、西成高校のとなりカフェというのは、この居場所カフェの元祖なんですけど、7年前（2011年）の2学期から始まりました。

そもそも、7年前というと、僕は大阪では老舗のNPO法人淡路ブラッツというひきこもり支援団体がありまして、僕はそこで10年間代表をしていました。ひきこもり支援というのは対象が大体30歳前後です。30歳前後で淡路ブラッツという居場所にやってきて、そこから日常生活の訓練や練習をする。

「日常生活」は就労ではありません。調理やお掃除をする、みんなでカラオケに行く、ちょっと外出に行く、そういうようなことはひきこもりを数年していると、もうできなくなっています。なので、日常生活の体験をやってみて、そこからやっと就労の面談に入っていく、というのが淡路ブラッツのひきこもり支援の王道です。そうやってスモールステップを積み重ねていくと、大抵ひきこもり支援が成功する。発達障害の知識もすごく要ります。

“となりカフェ”の設立②

——ひきこもりになる背景

僕は、ひきこもり支援はけっこう名人の域に達して、多分石井さんもそうなんですけど、でも、どんどんひきこもりの人がやってくるんです。減ることはないです。ある意味、淡路ブラッツの経営は安定しています。

でも、何百人も支援すると、「なぜひきこもりはこんなに定期的に供給されるんだろう」というふうに思うようになります。ひきこもり支援は収入が安定しているから疲れることはな

いですけど、ただ、代表を10年もやっていると、「そのひきこもりがこんなに量産されていく大元があるんじゃないか」というふうに思い始めたのが8〜9年くらい前です。

言ってみると、僕は面談というかカウンセリング担当で、初めて淡路ブラッツにやってくる親御さんや本人を受け入れるのは僕の面談でした。そのエピソードを聞いていくと、大抵高校中退生でした。全部とは言いませんけど、今は大学中退がいっぱい、就職失敗組も入っています。

当時、10年ぐらい前ですと、大抵は高校中退組が入っていたのですが、すぐひきこもりになっていたわけではありません。大阪だと、大阪府立桃谷高校など有名な通信制高校があるんですけど、そこに籍だけ属しておいて、スクーリングに行ける子もいますけど、実態としてはひきこもりになっている生徒がいます。

だから、全日制の高校を中退してひきこもりになって、そこから20代前半は何かをするわけではなくて、ずっと引きこもっているんです。徐々に焦りが出てくるのか分かりませんが、25歳・26歳くらいを過ぎてきたら動きが出てきて、27・28歳くらいになって初めてNPOにやってきます。だから、実質10年くらい人生が止まるんですね。引きこもっている間も、アニメを見たりゲームをしたりして、精神的には屈折しながらも充実しているんですけども。

“となりカフェ”の設立③

——高校中退の防御によるひきこもり予防

でも、その若者たちを見ていると、高校中退をなんとか止めると、ひきこもり予防、あるいは社会に潜在化していくとか、存在が消されているような時期を10年防御することができるんじゃないか、と思いました。長いこと10年、淡路ブラッツというところで経営を立て直して割と順調にっていました。けれども、40

代後半だったと思うんですけれども、今 54 歳なんですけれども、淡路プラッツを辞めて「ドーナツトーク」を作って、自分が元気なうちにとか、最後にやることは、ひきこもりを予防するという意味での高校中退の防御とか、それをやってみようと思いました。

“となりカフェ”の設立④

——行政との連携と海外視察

ちょうどその時組んでいた大阪府の青少年課（＝政策企画部 青少年・地域安全室 青少年課）というセクションがあります。そこは元々非行対策の部門なんですけど、典型的な非行は少なくなっていて、対象としてはひきこもりや発達障害、その辺の新しい生きづらさをもった若者が中心になっていました。その流れで、青少年課の課長補佐という立場のひとと僕の息が合いました。先程言ったように、ひきこもりの源泉に高校中退がある、と。ひきこもり支援はその課長補佐と淡路プラッツが色々画期的な事業を作っていて、結構評価を受けたんです。その流れで、高校中退予防の事業を作ってみよう。

そこで提案されたのは、淡路プラッツの部下である辻田というスタッフがいて、内閣府の事業でドイツへ 3 週間くらいの視察に行くことになったんです。ドイツの青少年支援を学ぶ機会があって、そこで展開されていたのが居場所カフェで、そういう名前ではなかったですけど、高校生たちが高校生たちにカフェを運営・提供するというものでした。高校生たちが学校内のスペースを借りて、生徒たちにコーヒーやお菓子を提供するというドイツの取り組みを見て、「これは日本でもやったらいいんじゃないですか」と。ひきこもりの源泉としての高校中退のことを彼女も知っていたので、それを帰ってきて僕に言い、それを課長代理に言うと、「それでやってみる」ということになりました。

“となりカフェ”の設立⑤——事業資金の獲得

そこで、行政の青少年課の課長代理と NPO の辻田が組んで、福祉課にプレゼンテーションをしてきました。額としては多くはなく、そんな何百万円もなかったですが、百万円を切ることもなかったと思います。初動としては「まあそこそこ」だったと思います。こうして、お金が上手いことできたという事情があります。

でも、半年で終わりました。建物管理や指定管理ですと福祉系の団体に任せる 3～4 年の事業もあるんですけど、青少年支援の事業の多くは単年度事業で、毎年代表がその事業を継続させるために頭をひねります。この居場所カフェも半年で始まって終わったということでした。

“となりカフェ”の継続と法人設立

2 年目は、4 月から始められなかったです。1 年目は福祉課の事業と一緒に予算を取ったんですけど、2 年目は青少年課が国の事業から頑張って予算を取ってきました。プロポーザルという公開審査があって、いくつかの NPO が名乗りをあげたんですけれども、我々も名乗りを上げて、1 学期の終わり頃の 6 月か 7 月くらいから始まったのでした。

それもお金がありませんでした。淡路プラッツはいっぱい事業をしていましたけど、その中では一番下の方です。

2 年目から、僕は淡路プラッツを退職しまして、一般社団法人 office ドーナツトークという今の小さい法人をつくりました。皆さんも聞かれたことがあると思うんですけど、大阪市の南部に西成区や住吉区など日本を代表する貧困エリアがあります。特に西成区はそうなんですけど、ホームレスの問題もあって、単純には言えないですが、4 人に 1 人が生活保護です。そこに西成高校はあります。4 人に 1 人が生活保護を受けるから、大阪市南部で貧困支援をきち

んとやろうと考えました。「貧困支援であれば児童虐待の支援をきちんとやろう」と思って始めたのがドーナツトークでしたので、初年度から居場所カフェを始めるようになりました。

カフェに対する先生方の反応①——最初期

西成高校の先生方に最初から理解をされていたのかというと、そうではありません。妨害されることはなかったです。どういうふうに理解されたかということ、「新しくサボる場所が増えた」と。「今までだったら、例えば、サッカー部の部室の裏でタバコ吸っていたのが、居場所カフェではタバコ吸わへんやろけど、ぶらぶらする、サボる場所をまた作りやがって」みたいな感じです。多分、最初は7～8割の先生がこう思ったのではないですかね。

カフェに対する先生方の理解の促進

だから、僕は最初に職員会議へ説明しに行きましたし、担当の辻田なんて教室を一つひとつ回って説明しに行きました。校長会でも僕と辻田でスピーチしにも行きました。あと、西成高校でも力を持っている先生方がいるんですが、教員の世界は飲みニケーションが大きくて、その先生方と何回も飲みに行きました。

僕は人前でしゃべるときは割とかちかちとしゃべって、専門が哲学なので、フォーマルな場では哲学的なトークを論理的にしゃべります。けれども、飲みに行くとこんな僕ではなく、たらたらしゃべるんですね。日常のだったらした顔を見せないと、先生方は信用してくれない。そういう閉じた文化があります。

僕はもう入っていませんけど、ドーナツトークの若手のスタッフに、障害をもつ生徒のお手伝いをするような役柄のアルバイトとして、教室の後ろに入ってもらって授業を手伝った、というのも1回・2回ではないですね。何回も入ってやりました。

あとは、西成高校の生徒支援委員会。ものすごく珍しいんですけど、生徒情報共有会議というのがありまして、毎週あるんですけども、それに僕と辻田が毎週出て、生徒の様子を伝えるようにしました。

カフェに対する高校からの期待

山田校長という有名な校長先生から頼まれたのは、学校には不登校・障害・非行という三大テーマがあって、西成高校は2人担任制でその三大テーマをなんとかケアとカバーができています。ただ、その予備軍は40～50人います。教室で授業をするとか給食を一緒に食べるとかしていたら、「この生徒はいずれ不登校をしよう」だとかわかるんだけど、その不登校・非行・障害という三大テーマを担当制の先生たちが一生懸命ケアとカバーしている間は、予備軍の40～50人にはとても手がまわらない。そこで、「予備軍の40～50人をなんとかとなりカフェという居場所事業で支えてほしい」というふうに言われました。そこを意識的に支えるようにしています。

カフェに対する先生方の反応②——数年後

そうすると、徐々にですけど、3年目辺りからちょっと風向きが変わってきたと思います。先生は3～4年でどんどん変わっていきますので、いまや僕が一番古株かもしれません。今年で7年目になって、僕の上にはあと1人か2人しかいないという感じなので、もうなんか偉そうにしています。

でも、たぶん心の中では「となりカフェって何よ」と思っている先生がまだまだいると思います。今年や去年入ったという来たばかりの人は、となりカフェがどう育ってきたかを知りませんので、「またサボるところがここにある」と。西成高校という、言葉は悪いですけど、できない子が集まる学校に、こんなサボる場をつ

くってどうするんだと思う先生がいます。これを真正面から議論してもほとんど意味がなくて、また飲みに行ったりするだけなんですけれど。それは延々と繰り返しですね。

担当行政部門の変化と事業資金の中断

——青少年課から教育委員会へ

予算面でいうと、プロポーザルというかプレゼンには僕は強いので、5年目までは大阪府の事業で毎年やり繰りして、大体予算で活動できているんですけど、去年から元祖の居場所カフェのとなりカフェが落とされました。なんで落とされたのかは謎です。

でも、皮肉なことに、青少年課の事業でやってきたのは最初の5年なんですね。これは冒頭にちょっと言いましたが、青少年課は端っこの方の部門で、非行問題が少なくなってなんとか問題を探してる部門です。

その一つとして、「高校生サバイバー」という大きめのフォーラムを5年前から始めています。1年目は関西のマスコミやテレビ局が全部集結しました。人生で初めて4台ぐらいのカメラに囲まれて、わっとライトに浴びて、取材を受けたりするぐらい注目はありました。2年目は、例えば、教育庁のお偉いさんも呼んでスピーチをしてもらいました。高校生サバイバーという大きな教育イベントを作りながら、徐々に「この事業は必要ですよ」というのを大阪の中で熟成させてきたんですね。それでやっと去年、予算が少ない青少年課の事業から教育委員会の事業になったんです。そうなった途端、西成高校のとなりカフェは落とされたんですよ。なぜかわかりません。

僕は去年の春の3月頃に、西成高校がついに教育委員会から予算が下りたので、「6年目のとなりカフェをよろしくお願いします」とって熱弁をふるってきたんですけど、見事落とされました。多分、行政からすると色々なバランス

があるんですね。

中断後の事業資金の獲得

——クラウドファンディングの挑戦

でも、西成高校にとなりカフェを消すことはできないということで。去年から教育庁の予算でやってる別のNPOの無難な就労支援の居場所と並行して、となりカフェがまだあるんですよ。「となりカフェがなくなってしまったら困る」と校長と先生方の意思があって。

山田校長という方が、7年前に最初にとなりカフェを迎えてくれたんですけど、すぐ進学校に異動になり、2年前の冬に一旦定年になりました。普通は、校長になって定年で終わりなんですよ。なぜかという、普通の先生は65歳から年金が出るまでの間、「5年間ぶらぶらしてもしゃーないだろう」ということで、給料は下がるんですけど再任用という方法を採用します。けれども、校長で再任用されるためには試験があります。給料も下がるし、待遇もよろしくはないのに、わざわざ再任用で山田校長が帰ってきてくれたんです。その理由の一つには、はっきり言いませんが多分、「もう1回となりカフェを一緒にやってみたい」というのもあったと思いますね。

山田校長と一緒に大和東高校に行ったんですけど、そのときに、となりカフェは落とされたというなんか面白い事態になっていて、「じゃ、先生どうしましょう？」と言ったら、「クラウドファンディングやりましょう」と言うので、人生で初めて「CAMPFIRE」というのにチャレンジしてみたんですね。そうしたら、3週間で15万円ほど、今年も「FAAVO」という、CAMPFIREの傘下になったんですけども、民間のクラウドファンディングでチャレンジして15万円ほど集まりました。

あとは、それほど多くはないんですけども、校長予算でいくらかと、手渡しの寄付などもあ

って、去年から潰れずに続いています。

“となりカフェ”の重要性

——高校内居場所カフェの「フラッグ」

となりカフェはある種のフラッグというか、どこに行っても、今回の北海道の我々の旅でも「元祖・居場所カフェ」というふうに紹介していただきます。実際そうなんですけども。となりカフェの旗を降ろすわけには多分いかないな、と思うんですね。お金は安いですが、僕はとなりカフェを広告塔としてやっている。西成高校も困難校としてのブランドがある。

となりカフェも、例えば、ひらがなで「となり」、カタカナで「カフェ」、そういう居場所の名前を必死で考えてブランディングしました。ものすごく議論をして辻田と2人で必死に考えたこともあって、なんと言うか、ある種の求心力もあるのかなあ、と思っています。多分来年度も予算は苦しいんでしょうけど、1個のモデルを作りたいなあ、と思うんですね。

神奈川の方はみんな独自に頑張って予算を獲得しているんですけども、大阪は最初から行政がそんな感じで動いたので、全然ダメなんです。独自性がないというか、発信力も弱いんですし。となりカフェはいいチャンスで、行政の支援がなくなったので、独自予算の中で来年からもやっていこうかなと思っています。

大阪府立長吉高校という同じ府立高校で、教育委員会の予算でやっている「なかカフェ」というのは、去年も今年もやっています。色んな居場所カフェがあるんですけど、そのフラッグになるとなりカフェは、常に財源を求めてさ迷い歩く、霊のようにさ迷い歩いて、頑張っていきたいと思っています。

モーニングとなりカフェの概要

高橋：去年から朝やっているものも、ちょっと。
田中：「モーニングとなりカフェ」っていうの

は、去年から独自事業になったので腹が立って、「教育委員会に嫌がらせみたいになつたろう」と思って(笑)。みんな朝ご飯食べてないので、朝の7時から朝食を提供しています。みんな思春期でひねくれて食べていないんじゃないかと、親がよくしてくれませんが、朝食を提供するというのを去年からやりだして、非常に話題になりました。

【報告3】

報告の概要——学校との折り合いのつけ方

石井：小川がさっき写真をお見せしましたよね。「学校の中でずいぶん好き勝手なことやってるな」と思われたかと思います。「治外法権」というふうに言われることもあります。学校の中であって学校じゃないみたいな運営をしているわけなんですけれども、学校との折り合いをどういうふうにつけているのかについて、話をしたいと思います。

まず最初に押さえておきたいのは、僕が「パーソナルサポートサービス」っていう内閣府のモデル事業の相談員として学校に入ったんです。それは、パーソナルサポートサービスを運営している横浜市子ども青少年局の局長と、田奈高校の校長先生がインフォーマルに出会って、「うちの高校をサポートしてくださいよ」みたいな形で始まったんです。

その後、パーソナルサポートサービスがなくなりもしたんですけども、ここまで一貫して、学校からお金を一切もらっていません。僕は8年この高校にいますけども、備品代みたいな感じで20万円くらいもらうこともあるんですけども、基本的には学校からお金をもらっていないというのがポイントとしてあるかなと思っています。

もちろん、教育行政のお金も一銭も入っていないので、僕たちは学校の中のヒエラルキーには属していないということです。僕たちの上司が

いないこととか、僕たちの机が職員室にないことが一つのポイントであるし、ウィークポイントにもなるという、そういう話ができるかなと思います。

親と先生以外の大人との出会い

僕たちは、田中さんと一緒にひきこもりの支援をずっとやってきていますけれども、田中さんが言ったように、高校中退してしまったひきこもりの若者たちは、学校の先生と自分の親以外の大人にはほぼ出会わないまま、社会から孤立している状態になるわけです。親と先生というのは、ある種モラルとか、批判とか、しつけとか、そういうものを守らせる側の人たちじゃないですか。で、その外側にいる大人に出会ってない若者たちって、本当に生きづらいんですよ。ストライクゾーンがめちゃくちゃ狭いという感じです。僕たちは親と先生以外の大人に、ひきこもる前にどれだけ出会っておけるかということが、その後の生存確率を上げていける、ということを考えているんです。

なので、僕たちのカフェにはボランティアさんがたくさん来ています。今まで出てきましたが、今の学校って、最近の学校の先生ってすごくスーツ着てるんですよ。僕は学校の中でスーツを絶対着ないし、いつも帽子かぶってるんですけども、学校の中で学校の先生らしくしてないということがすごく重要で、第三者性を担保していることになるのかな、と思っています。

学校の内部化することのデメリット

——批判性と早期発見の機会の喪失

それで、学校の内部化しないということはまたポイントで、内部化してしまうことで批判性を失うんです。例えば、厚生労働省からお金をもらい続けている NPO は、厚生労働省に対する批判ができなくなっていくんです。お金をも

らうということは、批判性を失うところがあったりもするので、やせ我慢をしながらやってるというようなことがあります。

内部化してしまうことのデメリットとして、早期発見のチャンスがなくなってしまう。僕たちはひきこもりの支援をしていて、支援機関で待っていたんでは出会えないので、学校にアウトリーチして学校に入っている。そういう僕たちが先生と同じ視点を持ってしまうと、発見の視点も同じくなくなってしまうんです。そうならないようにということが大事です。僕たちは、採点をしない大人として学校にいるわけです。生徒を評価しないということで、生徒たちは安心をして物を言ってくれる。先生化してはいけないっていうのはポイントかな、というふうに思っています。

批判性の担保と信頼の獲得のバランス

批判性を失ってはいけないということと、批判しすぎて先生と喧嘩してはいけないということ、ここがバランスになってくると思います。「生徒ファースト」という言葉がありますけど、学校の中では必ずしも「生徒ファースト」で動いていない瞬間、「ティーチャーズファースト」みたいな瞬間は、いくらでもあったりするわけです。そういうときに、それをどう捉えていくのか。

まず、その先生の敵になってしまったのでは、仕事をさせてもらえないんです。先生たちにとってメリットのある人材としていることが、とても重要なと思っています。仕事をさせてもらえないというのは、カフェをやらせてもらえないとか、オリエンテーションで生徒たちと出会えないとか、そういったことです。

ちなみに、僕たちは学校側の信用を勝ち取っているんで、1年生が入学した1週間後ぐらいに仲良くなるための遠足があるんですけど、そこに引率として私たちがついていきます。今は

「合格発表から入学式までの間の入学前支援をしたい」というふうに学校に提案していて、これも校長たちが「やろう」ということを言ってくれています。まだ予算の獲得などはできていないですけど。信頼を獲得しながら、批判性を失わないということがポイントになっています。

学校運営評議員としての発言

批判性ということかというと、僕は田奈高校と大和東高校の 2 つの学校の学校運営評議員なんです。これはもう 6 年前から、学校に入ってからすぐになりましたけども、今はコミュニティスクールというのが文科省のほうで言われていて、全部の学校をコミュニティスクール化していく、地域の方々と一緒に「学校の運営をしていきなさい」というふうに、学校が言われているんです。

学校運営評議員は、学校の中退者のデータなどの外に出さないデータがどんどん出てきて、それに対してコメントする立場にあるんですよ。僕は校内専門家の一人なんですけれども、「校内専門家同士が全然コミュニケーション取れてません」「先生たちはなんでこんなに僕たちのことを知らないんですか？」と、ここで僕がコメントしていくということが、学校の中で伝わっていたり、ある種の批判性になったりしてくるかな、というふうに思っています。

学校からカフェに対する申し入れ

ちなみに、写真などを見ていると、僕たちは治外法権的に何でもかんでもあそこでやっているように見えますけれども、「駄目だ」と言われることがあります。

例えば、この間のハロウィンのときに、生徒たちとゾンビメイクして遊ぼうと思っていたら、「それは NG」「それはダメ」って言われました。あと、学校の中でセクシャルマイノリテ

ィの生徒がいて、そのことを「カフェの日にカミングアウトしたい」という話になりました。国際カミングアウトデーというのが 10 月何日にあり、その日がたまたまカフェの日で、それにあわせてその生徒にスピーチをしてもらう。その前には、セクシャルマイノリティ関連の活動をしている方に来てもらって、「左利きの人っているよね」みたいな話からやるという企画を立てただけけれども、それも学校から NG をくらっています。これはカミングアウトを受けた生徒側が受け止めきれなくなって、それが Twitter などでは誹謗中傷に繋がるのではないかと、というリスクがあります。何でもかんでもやりたいことやれているわけではないというのも、お伝えしておこうかなと思います。

経営の不安定さと中断のリスク

学校から予算をとらないでやっていく中で、不安定な経営の話が田中さんから出てきましたけれども、あります。今現状でいうと、パノラマは来年度 2 つのカフェを運営する目途は立っていません。それに対しては、様々なことをやっていますけれども、今のところ目途は立っていないというのがあります。なくなるリスクが常にあるということです。

カフェに対する社会的評価

あと、学校や教育委員会から予算が出てないということは、教育行政からは必要とされていないんじゃないか、という見方もされます。僕たちが勝手にやっていることであって、教育行政側は望んでいない、というような見方がされる。社会的評価の低さみたいなことが出てくる。

ちなみに、神奈川県では、県議会の議会答弁で、ある議員の方が、「神奈川では 12 箇所のカフェができていて、教育長としてはどういうふうに考えてるんですか」みたいなことを議員が質問したところ、教育長は、「一定程度、中退

などに対する効果があるというふうに思っている。ひいては何らかの形でバックアップしていく」と答弁しています。「何らかの形」って具体的に言うと、学校の中のサポートティーチャー制度みたいなものがあって、学校の人材に登録しておく、その人材を学校は有償で使うことができ、その人をカフェに投入しようというようなものです。NPO 法人経営者である僕からすると、あまりおいしくない、ありがたくない形かなというふうになっています。それでも一歩前進かな、とも思いますが。

カフェが学校のメリットになる①

——早期発見とそのジレンマ

学校のメリットになっていかなければいけない、というのがすごくカフェをやっていると感じているところです。一生徒との接点になる、教員が知らない情報をキャッチしていくというのは、僕たちの早期発見の目ですね。

これが一番大きなポイントになるかなと思いますが、早期発見というのは、言葉を換えると、パンドラの箱を開けることなんです。知らなければ目を瞑っていられたことを、僕たちが臭い蓋をあけてしまうんです。僕たちが報告したことは何らかの手立てを打たなければいけなくなるので、それは先生の仕事になっていくわけです。だから、そこに何の加配もされていない状況であれば、今の先生たちの多忙感をどうするかということと相反してしまっているところはあります。

だから、「NPO を入れれば先生たちの仕事は楽になりますよ」というのは大嘘の営業で、実は NPO を入れれば、早期発見してしまうから先生の仕事が増えるんです。ここは先生方がどういうふうに腹をくくるか、教育行政がどういうふうに予算立てをしていくかということも入れていかないと、先生たちがカフェへの関心を持ちにくい。関心を持てば持つほど、自分

の仕事が増えるという、そういうジレンマが学校の中に起こっているというのが実際だろうな、というふうに思います。

カフェが学校のメリットになる②

——教員不信・学校不信の生徒との接点

もう一つのメリットとして、特に中退間際の生徒たちは、教員に対してものすごく不信感が高まっています。学校に来なくなって、気持ちが学校に向いていない状況になって、先生が電話しても LINE しても繋がらない。そういう状況になっていて、僕たちも相談員をして、「3 時間目、〇〇ちゃんが行きますからよろしく」と言われて待っていても来ないんです。そういうふうになったら結構お手上げなんです。

それでも、僕たちは、先生不信・学校不信の生徒たちと会える可能性が高いんです。僕たちに味方になってもらったり、ぴっかりカフェや文化祭で歌ったりして信頼貯金を貯めていきながら、「ああ、小川さんだったら話してもいいや」と、学校の大人じゃない中立な人と出会えることは、そこで聞いた情報を学校で共有することによって、学校のメリットになっていくということが起こっているなと思っています。

カフェが学校のメリットになる③

——卒業後・中退後の生徒との接点

あと、学校の先生たちは、自分が学校に所属している間が自分の仕事であって、基本的には、卒業した後や中退した後はその生徒たちにリーチしないんです。次の生徒、新しい生徒が入学してくるので、生徒たちの所属という、学校に所属しているかどうかということがものすごく重要となります。

けれども、僕たち NPO はそれを一切問わない。学校というのはクライアントと出会える場所であって、その人が学校に所属しているかどうかは関係ないので、卒業後・中退後も出会っ

て支援をし続けていく。僕たちは卒業を区切りとしない支援をずっとしているということです。「出会った以上、その子の人生をどこまでも背負いたいな」と思って付き合っている。

ところが、実は先生たちも、所属を失ったからといって気持ち的にすっぱり切れているわけではなくて、やはりそこには情が残っているんです。でも、そのどうしようもない情が残った部分を僕たちが支援して行って、「あの子、部屋決まりましたよ」「あの子、今仕事できましたよ」と言うと、先生たちがほっと胸をなで下ろすみたいなことは多いです。

地域から見た田奈高校と生徒の限界設定

僕が行ってる学校とか、田中さんが行ってる学校は、おそらく地域から白い目で見られています。田奈高校は駅前のマックが出禁です。実際駅で出会うと、邪魔なところでたむろしています。「お前ら、端でしゃべれよ」みたいなことも思ったりするわけです。近くのコンビニなども出禁です。ごく一部の生徒たちがやらかすんですけども、「田奈の子たちは」というふうになっちゃいます。アルバイトの電話をかけて、「～～でみたんですけど」「どこの高校生？」

「田奈高校」で電話がガチャと切られるとか、地域から差別を受けている学校なんですよ。

「田奈高校」というだけで、人生の可能性が3分の1ぐらい地域から排除されています。そういうのを生徒たちも実感しています。だから、日常的な会話の中で「どうせ田奈だし」と日常的によく出てきます。自分で自分の限界設定を16～17歳でしてしまうんです。

学校への貢献①

——学校のブランディング

「この限界設定に繋がっている学校のレッテルをはがせるのは誰か？」と言ったら、これは学校ではなくて、おそらく僕たちなんです。

地域の方たちが年間300人学校に入ってきて、可愛い生徒たちが「いただきます」「ありがとうございます」「ごちそうさま」と言いながら過ごしていく。一部の生徒は、味噌汁に具をたくさん入れて食わずに帰っていくみたいなやつもいるけど、多くの生徒達はそうではないわけです。廊下をバイクで走っていくやつがいるとか、学校の中に授乳室があるとか、そういう都市伝説があるけれども、それは都市伝説だということに気付くわけです。1日カフェやっていると、おばちゃんたちは男子生徒たちにほだされてファンになって、また来たくなってくるわけです。そういうファンができていく。

僕はその人たちのことを「善玉菌」と呼んでいるんですけども、カフェに来て善玉菌になって、地域に戻ってもらう。地域の中で「田奈高校の生徒たち」と出てきても、「それは昔の話で、最近ではNPOも入っていて違うんだよ」というふうに、悪玉菌を殺していつてくれるんです。そういう善玉菌を年間400人入れて、400人輩出している。これが10年間続いたら、地域の人たちが田奈高校のことを理解して、「田奈校生だったら面接してみようかな」「田奈高校に求人を出してみようかな」というふうになっていく可能性があるじゃないですか。僕たちは学校のブランディングを変えていくということができていくんじゃないかな。

地域での活動と学校のインターフェイス

なので、地域のイベントには僕が積極的に出ていきます。いま地域で「田奈高校でぴっかりカフェやってます」とか言うと、大体わかってくれるんです。「ボランティアに来ませんか？」と言うと、本当によく来てくれるんですよ。10人ぐらいボランティアで来ている内、8人が近所からチャリンコで来ているおばちゃんという状況になっているんです。

僕が明後日、田奈高校のある青葉台の公園で

13時半から15時半までレコードをまわすDJをやるんですけども、DJをやりながらここで「びっくりカフェやってます」みたいなこと書いておくと、またそこで地域の人と出会っている。そんな感じで、学校はインターフェイスを持っていないんだけど、僕がいることによって学校のインターフェイスになっていて、300～400人のボランティアをマネジメントして学校にすることができる。それが大きなメリットになってるかなというふうに思います。

学校への貢献②

——入試倍率や学校の人気の向上

地域でのブランディングの向上が、引いては入試倍率を上げていく。今、「びっくりカフェがあるから田奈高校に行きたいんだ」という子たちも実際にいるんです。

小川が説明しましたが、クリエイティブスクールの5校のうち入試倍率がついているのは大和東高校だけで、残りの4校は1倍になっていないんです。1倍になっていないということは、名前を書ければ全員合格です。「意欲・関心・態度で取ります」とか言っても絵空事で、全員入学が可能になっている。99%が進学しているってことは、その中に発達障害・知的障害の子たちや、学ぶ意欲のない子たちが普通に入学してくるので、学校の中ははっきり言うとカオスなんです。めっちゃカオス。授業参観で僕なんかがいると、授業中なのに平気で僕たち「今日カフェあるの？」と話しかけてくる。そういう状況になっています。

で、入試倍率というか、その学校の人気が上がっていくことで、「クリエイティブスクール」に合った、大和東高校に合った、田奈高校に合った子たちが入学してくるような形に貢献している。

社会への発信における配慮①

——スティグマを生まない表現

あと、ちょっと気をつけてることとして、SNSで発信したことを先生も見てるんです。「個人情報漏れるから削除してください」なんてことを言われることもありますし、生徒がそれを見ることもあります。

僕たちパノラマのFacebookを見てもらえばわかると思いますけど、基本的には、「貧困」などのワードは一切使っていません。生徒たちが見て、そこで僕たちがスティグマを発生させてしまいかねない。「そんなためにやってるんだ」なんてことにならないようにしています。

だから、今の時代、20年ぐらい前にはそんなこと気にしなくてもよかったと思いますが、今は生徒も見ると。Twitterを生徒がフォローしてくるということはいくらでもあるので、発信・発言みたいなことに関しては、すごく注意をしているし、新聞やマスコミの取材なんかに、「こういう言い方をやめてくれ」みたいな感じで注意を払っています。

実際、「うららちゃん問題」というのがありました。相対的貧困の問題でうららちゃんという子が出て、NHKに追われて、家まで行ったら、家にクーラーがあって、色んな文房具があって、「これのどこか貧乏なんだ！」といってTwitterでめちゃくちゃ叩かれました。そういうマスコミ報道が生徒に及ぼす影響を、学校はコンプライアンス的にものすごく気にしています。それは僕たちも気にせざるを得ないし、気にするべきだと思うので、そのバランスをとっています。

社会への発信における配慮②

——校内専門家たちのジェラシー

もう一つ、校内専門家たちは、けっこう嫉妬焼きなんです。「びっくりカフェができたおかげでこうなってる」みたいな言い方をすると、

「私たちだって頑張ってるんですけど」みたいな感じであらぬ嫉妬の矢が飛んでくる。だから、マスコミで何かやってもらうときには、「田奈高校の色んな取り組みの中の一つなんですって書いてください」と言わなければ、学校の中で生き延びられなくなってくる。校内連携がスムーズに回らなくなることもあるので、そういうところも結構バランスとってやっています。

短期決戦型／長期決戦型の人材

先生たちって短期決戦型の人材なんですね。3年間でどう結果を出すかというふうに育てられている人たちだと思うんです。僕たち支援者というのは長期決戦型の人材なので、時間の軸がすごく違うんです。この時間の軸の違いが生徒たちにとっての「ゆるさ」になって、僕たちのところに来るわけです。その意味で言えば、僕たちは中退した後、卒業した後も付き合っていくので、その瞬間に腹を立てずに、むしろ今

この子学校から離れたほうが僕たちの支援が入ってくるな、という場合もあります。一旦学校から離れちゃって、このあと何らかの形で卒業資格取らせてもいいのかな、というふうに考える場合もあります。

学校に NPO がいる意味

また、学校は校長が変わるなどすると、やはりムードも変わってくるんです。学校のソーシャルスキルのようなマインドが減ってきたときこそ、僕たち NPO がいる意味があるのかなと思います。先生たちがみんなそういうソーシャルマインドを持ったら、僕たちは要らないわけなので。「だから自分たちがいるのかなあ」と、学校に対するムカつきみたいなこともあるんですけども、自分の中で折り合いをつけながら 8 年頑張ってきて、今があるという感じ です。

(完)

